

士づくり

Winter 新年号

土屋グループとクライアントをつなぐ季刊誌

障害があってもチャレンジすることを忘れない

池田泰允さんは19歳の時に川の事故で頸椎を損傷し、車いすユーザーとなりました。5年前より一人暮らしを始め、重度訪問介護（重訪）を利用しながら在宅ワークに従事しています。その傍ら社会活動に参加するなど、穏やかながらもアクティブな池田さんの生き方には、「自分が動くことで、少しでも未来は変えていける」という力強いメッセージが溢れています。

池田泰允（いけだひろのぶ）さん 38歳
在住：宮崎県日南市
病名：頸椎損傷による両上下肢機能障害



19歳で事故に遭って

19歳の時に川の事故で脊椎を損傷したのですが、当初はショックというか、自分の状況がどうなっているのかがまず分かっていませんでした。親戚に医療従事者がいたので、すぐに治療とリハビリの流れを作ってもらって落ち込んでいた暇もなく、その流れに身を任せて今の状態になっています。

友達からは「どうやって立ち直ったん？」と聞かれたりしますが、僕が逆にその友達の立場になったとしたら「落ち込んでる姿を見せて誰が嬉しいんだろう」と思っただけです。そんな姿を見せると友達も困るだろうというのが第一にあつて、そこからは極力、怪我をする前と同じような雰囲気で見られるように接しようと思った。それからリハビリにも取り組めたと考えています。

まず初めに相手のことを？

怪我をした原因が自分だったというのも大きいと思うんです。交通事故であれば相手のせいにはできませんが、僕は自分から川に飛び込んで、自分で怪我をしたので、「自分で選んで起こした」ということがあつて、向き合ってきているというはありますね。

障害を負ったことで変化は？

実際、この身体になりたくてなっているわけでもないんですけど、逆に考えたら、誰にもなれる身体ではないかと。

「この身体になったことで気づかされることも結構あったので、ラッキーだと捉えるようにしています。」

健康であることのありがたさや、自由に動かせるとの体の大事さもあり、やはり医療的ケアを受けている中で、いろんな方に支えてもらい、人に生かされていることを肌で感じることもありました。それまでは親は別としても、自分一人で生きてきたので勘違いしてたんですけど、多くの方に関わってもらっての自分だと感じています。

一人暮らし

施設退所後、5年ほど前から一人暮らしを始めました。きっかけは、やはり「自己選択ができる自由」とか、「自分らしい生活を送れる」というところでしたね。安心安全は施設でも担保されますが、決められた中での生活よりも、自分で選択できる自由が一番魅力かなと思っています。その分、責任は問われてきますが。

サービスのスタイルは？

一人暮らしの開始からしばらくして、ちょうどその頃に立ち上がった土屋の宮崎事業所のサービスを利用することになりました。現在、基本的には日中8～10時間のサービスを受けていて、家事全般と入浴介助、排泄処理がメインになっています。夜間は、たまに家族に頼っていただいているんですが、基本的には一人です。よほどの急変や体調不良、排便コントロールの失敗がない限り、なんとか

就労に当たっての行政交渉は？

日南市に相談したところ、特例も特例ということでしたが、意外とすんなり認めていただけました。制度上は就労できないと聞いていたので僕自身もびっくりしましたね。

余暇の過ごし方 ～出会いが人生を変えていく～

映画と音楽とパートナー

自宅ではもっぱら映画を見たり、レゲエを聴いたり、レコードを集めたりしているんですが、パートナーがいるので、休みが合う時に一緒に買い物に行ったりしています。パートナーには3人の子どもがいるので、一緒に遊んだり、週に1回は皆で食事するのも定例になっています。

パートナーの存在とは？

家族とはちよつと違う安心感というか、僕がハンディを持っているのを知った上で、「そういうのは関係ない」という形の出会いから交流から始まっているんです。障害を感じさせないような関わり方を持っていてくれる方なので、そういうところが一番の喜びになっています。

サーフィン

もともとアクティブな方なんですけど、障害を負ってからも車椅子バスケットや車いすマラソンといった障害者スポーツとの出会いがあり、そうしたところからいろんな方と出会って行く中で、「障害があつてもチャレンジすることを忘れない」というような考えを持って生活していました。日南市は身近に海があり、支援に入っていたりいる医療従事者にもサーフィンをされている方がいたので、ダメもとで「僕も海に入ることではできないだろうか」と相談したところ、快くサポートしてくださり、現在はサーフィンを楽しんでいます。

海に入った時の感想は？

一言で「ちょー気持ちいい」ですね（笑）

サーフィンの様子は
こちらから！

池田さんの
Instagram

他にも素敵な写真
が沢山あります！

障害があつてもチャレンジを

パブリックなおかげで障害のある方が活躍されるのを目にする機会も増えていますが、まだ街中を車椅子で歩いていると、好奇の視線を感じたりします。やはり自分たちが社会に出て行くには、いつまで経つても変わらないことには、いつまで経つても変わらないのかと思つています。見られることへの不安、好奇心目線は気にはなるんですけど、それを逆手に取って、知っていただく機会を僕らの方から作っていかなくてはならないかなと思つています。それもあつて街づくりに参加したり、日南市のボランティア講演指導員に登録して小中高の学生と交流したりしています。

どのような発信を？

僕らつて一般的に考えると「社会的弱者」って捉えられやすいと思うんですが、違う形で健常者と変わらないことをアピールできるのかなと思つています。その辺をもうちょつと発信していきながら、いろんな目線の考え方、生き方を伝えられるような人間になれたらと思つています。考える機会を作れるような人になりたいなと。

子どもたちに伝えたいことは？

「いつ自分がなるか分からないよ」ということと、「もし自分がそういう状況になった時にどうされたら嬉しいかを考えて人と関わってほしい」ということは伝えていきたいです。子どもたちはYouTubeにかなり興味を示してくれるので、動画編集なども工夫しながら、今後も学生に向けた講演に積極的に取り組んでいきたいですね。

土屋に期待すること

土屋さんのサポートがあるからできていることも色々あつてありがたいのですが、正直、どうしても「やつと関係性ができたかな」というタイミングでヘルパーさんが代わられていくというのがあります。ヘルパーさんとの関わり方としては極力、自分のプライベートもちゃんと見せて、人として関わっていただけると感じ接しさせていただけたいと思いますので、長くてもいいと思います。

一人で対応できるかなというところが、例えば緊急でなくても、ちよつとした不安な時に駆けつけていただけ方を確保したいという希望はあつて、それが叶うといいかなと思つております。

災害対策は？

少し前に宮崎で震度6弱の地震がありました。それこそ入浴した後のタイミングだったので、さすがに危機を感じました。ただ、その際にケースワーカーの方と、災害時にどういふ連携を図るのかについての話し合いができたのは良かったですね。

現状としては、自治会に登録しているので、定期的に地区の区長さんが訪問してくれたり、挨拶程度ではあります。地域の方と交流を図つたりしています。近所の方にも認知はしていただいているのかなと思つております。

重訪を利用しながら就労を

人材派遣関連の会社に勤務していて、平日は重訪を利用しながら、在宅で9時から16時まで仕事をしています。外部の企業さんと連携を図りながら、HPの検査業務をしています。具体的にはHPのバリアフリー化を目指すもので、視覚障害や聴覚障害のある方にとって使いやすい作りになっているかを検査する業務です。ちょうど今入社して5年目に入るところですが、毎日パソコンの画面とにらめっこしながら作業をしています。

未来に向けてのメッセージ

「一人じゃない」ということは伝えたいです。これだけ仲間がいるし、みなさんにとつてチャンスはいくらでもあると。やりかたは色々あると思うんですけど、自分らしいやり方で、伝え方や生き方があるのかなと思つています。

△ホームケア土屋 九州ブロック
エリアマネージャー・武田勇輝からの
コメント△

池田様はすこお優しい方なので、私たちにも甘えの部分が出てしまつていますが、まずはアテンダントの定着に精一杯努めて参ります。折角慣れてこられた頃にアテンダントが退職してしまうなどは、クライアントの方々に不都合が生じて迷惑もおかけすることと思つていますので、事業所としてできる努力は惜しみません。一方で、土屋の理念として「小さな声」を探し求めるということもあり、実際にまだまだ多くの方が支援を待っている状況でもあります。そのクライアントに慣れたアテンダントが、次のクライアントのニーズにお応えしなければいけないシフト調整が必要な場合もあります。宮崎事業所は昨年からは20名だったアテンダントが約60名と大幅に増え、離職率も非常に低くなつています。池田様にも「好意でアテンダントの紹介もいただき、その方も日南市で活躍いただけて期待しています。アテンダントの充実に伴つて新規の面々も増やしていきたいと思つていますので、今後ともどうぞよろしくお願致します。

土屋グループのトピックス

高浜代表よりご挨拶



新年、明けましておめでとうございます。
2024年11月より、株式会社土屋は第6期を迎えました。これもクライアントの皆さまのご信頼あってこそと、心より感謝申し上げます。
土屋グループでは、下記の5つの経営理念を掲げて事業を行っています。

- フィロソフィー 「生き延びる」の肯定
- バリュー つながりあい ささえあう 場の創造
- ミッション 探し求める 小さな声を
- ビジョン オールハッピーの社会の実現のために 永続するトータルケアカンパニーに進化する
- コアバリュー 世界を変えるために 私たちは変化し続ける

これらの経営理念を実現することが私たちの目的であり、第6期も引き続き継承していきたいと思っております。そして重度訪問介護サービスにおいては、一人でも多くの方々にサービスを届け、へき地ケアや離島ケアに本格的に取り組む方針です。また、高齢者の在宅生活を支えるためのインフラとして定期巡回サービスを拡充し、高齢者・障害者対応グループホームの立ち上げにも着手します。クライアントの皆さまが安心・安全に地域で暮らし続けられるよう、今後とも土屋グループ一丸となって、努力を惜しまず邁進する所存ですので、皆さまの変わらぬご愛顧の程、よろしくお願いたします。

社長室よりクライアントの皆さまへの御礼とお詫び

クライアントの皆さま・ご家族さまにおかれましては、「社会参加の状況についてのアンケート」(2024年10月)にご協力くださり、ありがとうございました。
本アンケートは、よりよい社会の実現に寄与すべく、障害をお持ちの方々の社会参加、とりわけ就労の状況やニーズ、就労にまつわる不安などにご回答いただいたものです。
現在、140通以上のご回答が届いており、申し訳ございませんが、アンケート結果につきましては今しばらくお時間をいただき、次回の「土づくり春号」にてお伝えさせていただきたく思っております。
改めまして、アンケートにご回答いただきました皆さまには、深く御礼申し上げます。
また、今回はご回答をいただくことが叶わなかった皆さまにおかれましては、今後はより一層の改善に努めてまいりますので、今後ともご協力・お力添えのほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

クライアントと土屋グループをつなぐ新コーナー「声を聞かせて！」

今回のテーマ
「アテンダントと距離が縮まった出来事」

ご回答は
こちらまで

tcy_shachoshitsu@care-tsuchiya.com



件名:「エピソード」

あるクライアントさんから「ヘルパーさんとの思い出やエピソードを読みたい」との声をいただきました。その声をリレーして、クライアントのみなさまからの声を募集します。集まった声は、今後土づくりにてご紹介いたします。

イベントのご報告

『岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会』発足記念イベント

開催日	2024年11月20日	登壇者	入江真大(医師/岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会 代表) 川口有美子(NPO 法人さくら会 副理事長) 小森栄作(ももたろう往診クリニック 院長) 高浜敏之(株式会社土屋 代表取締役 CEO)
テーマ	岡山の在宅医療と在宅福祉の連携		
参加人数	会場:約100名、オンライン:約500名		

株式会社土屋の後援により、岡山の在宅医療・福祉の連携促進を目指す新団体「岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会」(代表:入江真大医師)が2024年11月に設立されました。

◎ 入江医師が語る『岡山の在宅医療と在宅福祉を考える会』

目的 医療と福祉の連携を促進し、在宅療養環境の改善を図る。関係事業所に限らず、サービス利用者やその家族、地域住民を含めた交流を通じて、地域共生社会の実現を目指す。

背景 高齢化が進む日本では、地域包括ケアシステムが整備され、介護予防や生活支援の充実が図られているとはいえ、在宅医療・福祉の現場では、多職種の連携や理解の不十分さより、支援を必要とする方に適切なサービスが届けられていない状況が見受けられます。多職種が連携できる場の必要性を感じたことから、本会の設立に至りました。介護離職や、医療的ケア児を育てる親の就労制限に関する課題の解決も含め、今後は関連職種や利用者・ご家族、地域住民など様々な方が交流し、知識を深め、連携できる場を提供したいと考えています。そして、障害を持っていても安心して地域で暮らせる場を作りたいと思います。

◎ 川口有美子氏による基調講演「ALSの重度訪問介護」の概要をご紹介します!

当日のイベントでは、ALSのサポートセンター『NPO 法人さくら会』の副理事長であり、長らくALSの母親の介護をしてきた川口有美子さんによる基調講演が行われ、日本ALS協会の理事を12年間務めた経験から、呼吸器装着の有無に関する日本と海外の違いや、海外と比べて整備されている日本独自の難病対策についての話がなされました。

現在の日本の優れた難病支援制度は、川口さんの恩師である「さくら会」の初代理事長・橋本操氏や日本ALS協会等の活動により構築されてきたことでもあります。日本全国で多くの署名を集め、国に喀痰吸引を容認してもらうに至った経緯や、「さくら会」による全国各地での喀痰吸引の研修会、そしてそれら“草の根運動”を通して喀痰吸引が法制化されるに至った歴史は、24時間介護保障を可能とした大きな運動として記憶されています。
川口さんはまた、介護事業を自身で立ち上げ、当事者自らがヘルパーを育成するという「さくらモデル」を橋本氏と共に確立しました。家族を介護から解放し、単身独居の実現を目的とした革新的なモデルですが、そうした試行錯誤の歩みを通して、川口さんは患者・家族に向け、ご自身が「意思決定」を行うことの重要性について訴えられました。中でも、医師や事業所等に依頼すべきことを患者自身が把握し、市町村への介護給付の申請書類も自分で作成することで「自分のニーズを知る」ことの大切さ、その上で患者発信により多職種の方それぞれが安心して動ける状況を作ること、またできるだけ在宅介護を用いて家をオープンにし、密室化しないことが大切だとしています。

「自分のもとにあるものを探し出すよりも、自分を囲むものの中にいた方がいい」

(川口さんの恩師・立岩真也氏著『良い死/唯の生』より)

前号で予告しておりました高野元氏によるイベントにつきましては、日時が決定しましたらお知らせいたします。



クライアントのみなさまへ

広報土づくりへのご意見・ご感想はこちらまで
tcy_shachoshitsu@care-tsuchiya.com

当社介護サービスにおいて虐待や身体拘束が疑われる
場合がありますら、下記までご一報ください。
client@care-tsuchiya.com



発行元 株式会社土屋
岡山県井原市井原町192番地2 久安セントラルビル2階

